

説教 『 罪に対して死に、義によって生きる 』

小河信一

牧師

ペトロの手紙一 2章22節～25節

22 「この方は、罪を犯したことがなく、
その口には偽りがなかった。」

23 ののしられてものしり返さず、苦しめられても人を脅さず、正しくお裁きになる方にお任せになりました。²⁴ そして、十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きるようになるためです。そのお受けになった傷によって、あなたがたはいやされました。²⁵ あなたがたは羊のようにさまよっていましたが、今は、魂の牧者であり、監督者である方のところへ戻って来たのです。

2014年8月から、ペトロの手紙一 の講解説教を始めました。そして、今回、この手紙のクライマックスに至りました。

或る聖書の文書を通読したとき、その中のどの部分が、自分に迫って来るか、第一には聖霊の導きに拠ります。また、その時、それぞれの人の置かれている状況にも拠るでしょう。

そうした中で、聖書の各文書には、誰しもがこの個所こそ注目すべき、再三再四読み返すべきという中心があります。「霊で賛美し、理性でも賛美することにしましょう」（Iコリント14:15）という御言葉がありますが、私たちは理性をもって、聖書の各文書の中心〈クライマックス〉がどこにあるかを見抜くことが大切です。

ペトロの手紙一 2:22-25は、「何を信じるのか？」あるいは「健やかな信仰とは？」という私たちの問いに対し、明確に答えています。この御言葉をしっかり聞き取ることによって、私たちは信仰生活に、正しい指針が与えられます。

この講解説教を富士登山になぞらえて、前回（Iペトロ2:18-21）は今、山の八合目か九合目にさしかかっている所であると言いました。本来の登山ならば、まさに自力の発揮しどころ、最後の頑張りどころとなるわけですが、この手紙の頂点へとたどり着く際には、自力ではなく、ひたすらに聖霊の導

きに依り頼むことが肝要です。おのれを空しくして、神の御力により引き上げられるようにして、八合目・九合目から山頂に至るということです。

ペトロの手紙 一 2:22——

「この方は、罪を犯したことがなく、
その口には偽りがなかった。」 =イザヤ書53:9前半

ペトロの手紙 一、否、新約聖書全体の中でも最も美しい章句の初めに、旧約からの引用が置かれています。

召し使いの、主人から受ける苦しみ、不当な苦しみ、そして、キリストの私たちのための苦しみを思い巡らす中で、ペトロ（手紙の著者）はイザヤ書53章の聖句に出会いました。

著者がイザヤ書53:9の言葉をキリスト預言として受け止めたとき、主イエス・キリストの十字架の苦難が照らし出されました。すでに語られていた御言葉によって、福音が啓示されたのです。

使徒パウロもまた、「罪を犯したことがなく」というのは、キリストを指す言葉として理解しました。「罪と何のかかわりもない方」、キリストが私たちの罪を処分するために、罪を担ってくださったが故に、私たちは罪から救われ、神の義を得ることができたのだと語っています（Ⅱコリント5:21）。

ペトロの手紙 一 2:23——

（彼/キリストは）ののしられてもののしり返さず、苦しめられても人をさず、正しくお裁きになる方にお任せになりました。

いよいよ私たちの目の前に、キリストの十字架の道行きが展開されます。「ののしられてもののしり返さず、苦しめられても人をさず」と、対句形式でうたうように、キリストの姿が浮き彫りにされています。

私ならば、少しの批判でも、相手に言い返すか、周りの人にります。自分の正しさを主張しようとする。しかし、主イエスは全く違いました。主イエスがののしり返さなかったことは、四福音書を読めば明らかです。ゲツセマネの祈りや十字架上の七つの言葉を除いて、主イエスの十字架の場面、とりわけ、主イエスが嘲りを受けた場面においては、ほとんど沈黙されています。そこには、弁解がましいことは一切言わない、まことの忍耐をもって死を遂げられた主イエスの姿があります。

ここで、次回（講解説教）の聖書箇所ですが、ペトロの手紙 一 3:1「無言の行いによって」について説き明かします。これは、妻に、夫への姿勢を提言している箇所です。身内では、「言葉はあまり通用しない」とか、あるい

は、「言葉より行いが大切だから」と、一般的な教え・道徳を述べるのが趣旨ではありません。信仰上、「神の言葉は生きており、力を発揮し、どんなの剣よりも鋭く」（ヘブライ4:12）と証言される言葉は、もちろん夫へも有効です。それならば、なぜ、「無言の行い」を妻に勧めているのでしょうか。その理由は、ただ一つ「ののしられてもののしり返さず」という受難のキリストの姿にえ、ということではないでしょうか。たとえ実の相手が「ののしる」（Iペトロ3:16）ことはまれだとしても、相手の一言に、二言三言をもって言い返す我が身の弱さ（強さ？）を省みざるをえません。夫の前に、キリストを自ら主のとして映し出すということが、「無言の行いによって」との句に凝縮されています。

さらに、23節後半の「正しくお裁きになる方にお任せになりました」は、主イエス・キリストの十字架と復活を貫くような重要な証言です。主イエスは、見えざる神の御手に、御子にさえ隠れてしまったかに見えた（参照：マタイ27:46）神の正義に、身をゆだねられました。

主イエスは「正しくお裁きになる方」を仰ぎつつ、人間がしつらえた裁判にのぞまれました。その裁判の様子は、主イエスの十字架の道行きにおいて、映画の長回しのように延々と描き出されています。それは、祭司长・長老・律法学者、エルサレムの最高評議会の面々によるものと、ローマのユダヤ総督、ポンテオ・ピラトによるものです（マタイ26:57-27:31、ヨハネ18:12-19:16など）。前述の通り、それらのおごなりな……人間の側からすれば正義に満ちた……裁判において、主イエスはほとんど口をきかれませんでした。

私たちは、主イエスが「罪と何のかかわりもない方」であり、そこで不当な苦しみを味わわれたこと、それが試練であったことを見逃してはなりません。ペトロが！「不当な苦しみを受けることになっても、神がそうお望みだとわきまえて苦痛を耐えるなら、それは御心に適うことなのです」（Iペトロ2:19）と述べているように、私たちは、この世の「不当な苦しみ」、不当な裁きに向き合い、それらを乗り越えるように呼びかけられています（実際には〔回心する前〕ペトロは、主イエスの裁判の折、主を見捨てて逃げてしまいました！マタイ26:56,74-75）。

十字架へと至る途次、主イエスは不当な裁きを耐え忍ばれました。なぜなら、正しく裁かれる父なる神に、ゆだねきっておられたからです。主イエスは、父なる神が必ずや正しく裁いてくださることを乞い願い、祈っておられたに違いありません（参照：マタイ26:39,42）。

ペトロの手紙一 2:24——

そして、（彼/キリストは）十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きるようになるためです。そのお受けになった傷によって、あなたがたはいやされました。

この節は、福音の中心、クライマックス中のクライマックスです。

無垢な、罪を犯さなかった神の御子が、人類すべての罪を担ってくださいました。これは人間的な推察ですが、自分の何かの過ちについて、責任を取らねばと思って、罰または重荷を背負うとき、私たちは、「それは仕方がない」とか、「しっかりやり遂げよう」とか、という思いがよぎります。しかし、神の御子は何の「責任」も無いのに、嘲笑や侮辱うちに「わたしたちの罪」を背負われたのです。それは、私たちの想像を超えたことで、信ずべきことですが、主イエスの苦しみはいかに深かったことでしょう。

ここで、十字架に至るまでの苦しみのみならず、十字架の死そのものの苦しみをも見渡すということで、イザヤ書53:9後半を読みましょう。

その墓は神に逆らう者と共にされ

富める者と共に葬られた。

新約の四福音書による主イエスの十字架と復活物語……特に「空の墓」伝承……からは、ある意味で読み取りにくい点かもしれませんが、主イエスへの嘲りは、主の死（その象徴としての「墓」）を覆っていました。律法学者や群衆たちによる侮辱は、十字架において無惨な死を遂げさせ、その墓をも汚れで染めるというほどに、徹底していたのです。律法学者は、イエスという者は「神に逆らう者」と同列であり、そのような者として闇に葬り去らうという思惑を抱いていたのです。それは、神を神としない、神を「逆らう者」として向こう側へ、自分たちからは見えない場へと追いやる、重大な罪です。

神はあらかじめ私たちに、そのような人間の罪を、イザヤ書53:9後半のキリスト預言によって告知しておられました。使徒信条に「主は……死にて葬られ、陰府にくだり」とある通り、主イエス・キリストは一番低いところへ下られ、そこで死と罪の汚れを滅ぼされました。そのようにしてキリストは、「神に逆らう者」、すなわち、罪人の死を自らの上に引き受けられ、そこから罪人を救い出されたのです。神の光は、罪と死の闇の中で神の救いを願い求める人へ届いています（詩編139:11）。

ところで、福音の中心は、キリストの救いの御業に光をあてる共に、神に

救われた私たちの人生の方向性を指し示します。

ペトロの手紙 一 2:24——

わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きるようになるためです。

キリストの死と陰府くだりをもつての、罪からの救出は、ただひたすら神の側の働きです。しかし、私たちは、主の十字架によって助けられた者、その出来事による罪の贖いを信じる者として、自らも日々、キリストの死にあずかりながら生きています。それが「罪に対して死んで」ということで、私たちが罪から解放されていること、そして、なおもまわりついてくる罪からの逃れの道が備えられていることが含意されています。

今から将来へと向かう途次、私たちがよりすすむべきは、主イエスの十字架と復活によって現された神の義（正しさ）です。

神の支えのうちにこの「義によって（永遠に！）生きるように」という勧めを受け入れ、私たち自身の信仰とその生活のうちに、神の正しさと愛を映し出すのです。さらに言えば、私たちは罪性により、その身と魂が……正しさと愛とは正反対の……よこしまさ・憎しみ・無関心などに支配されてしまっていますので、繰り返し、神の正しさと愛に立ち帰ることが不可欠です。

かつて、「打ち砕かれ、嘆き、恐怖に襲われていた、娘なるわが民」（参照：エレミヤ書8:21-22）は、主にこう言われました。

エレミヤ書30:12-13——

¹² お前の切り傷はいえず

打ち傷は痛む。

¹³ お前の訴えは聞かれず

傷口につける薬はなく

いえることもない。

主イエス・キリストは、十字架の御業によって、「いくら手当てをしても無駄」だった民（エレミヤ書46:11）をいやされました。ギレアドの乳香でも、医者の手当てでもなく、「そのお受けになった傷によって、あなたがたはいやされました」（I ペトロ3:24）。復活が十字架の死からの出来事であったことを、常に私たちに想起させるかのごとく、よみがえりの主イエスのからだには、手にで刺された傷、そして、わき腹に槍で突かれた傷（ヨハネ福音書19:34、20:20,25）が残されていました。永遠の主なる神の御力が、傷という見栄えのしない、なものに注ぎ込まれたのです（I コリント15:43、II コリント12:10）。

ペトロの手紙一 2:25

(なぜならば) あなたがたは羊のようにさまよっていましたが、今は、魂の牧者であり、監督者である方のところへ戻って来たのです。

〈放浪〉「さまよっていました」から〈帰還〉「戻って来たのです」へと
いう軌跡が、つまり、神に救われた私たちの人生の方向性が明瞭です。この
節の冒頭に「なぜならば」という語があることに即せば、「なぜならば……
戻って来たからである」、だからこそ、この人生がそのように守られ続ける
ように、苦痛に耐え忍ぶのです（I ペトロ 2:19-20）、ということになります。

私たちはまず、「さまよっていました」という現実、言い換えれば、
日々、罪の誘惑にさらされている私たちの戦いの激しさを見つめなければな
りません。しかし、私たちは孤独にではなく、キリストのまなざし（「監督
者」の原意は「注視する / 見る」）の中で、「わたしたちは羊の群れ 道を誤
り、それぞれの方角に向かって行った」（イザヤ書 53:6）というれの生活を
振り返るのです。

ペトロの手紙一 2:25は、2:18-25の総括として、「魂の牧者 / 監督者」で
ある神、すなわち、主イエス・キリストのもとへ人々が戻って来るというこ
とを確認しています。高価な恵みの最大の価値が、信仰者として羊たちが、
牧者のところに帰って来ることによって置かれていることが分かります。「神の御
前」（I ペトロ 3:4）の全生活において神へ立ち帰るということが帰結である
のは、まことに福音にふさわしいことです。

ペトロの手紙一 2:18-20の召し使いたちへの〈勧め〉が、2:21を蝶番とし
て、2:22-25において、福音の核である〈キリスト讃歌〉へと至っています。
〈教理〉と信仰または日常の生活における〈勧め〉とが入り交じっていま
す。逆に言えば、〈教理〉と〈倫理〉とが分離していません。召し使いたち
への〈勧め〉から〈キリスト讃歌〉へ、という展開の中に、〈教理〉と〈倫
理〉とが一体化しているペトロの手紙一の特徴がよくあらわれています。

受くべき正当な苦しみであれ、不当な苦しみであれ、道を迷い、偽りの救
いに手を出すことなく、ひたすら十字架による救いに依り頼むことができる
ように、この手紙の一節一節とそのみごとな展開に心を留めたいと願いま
す。